
復元する世界（ダカーポ）持ってハイスクールD×D転生する

トトロ1234

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復元する世界タカーボ持つてハイスクールD×D転生する

【Nコード】

N2532Y

【作者名】

トトロ1234

【あらすじ】

この俺、芳乃連夜は、神のミスで死んでしまったらしい。「ちよっくから転生してこい。」といわれハイスクールD×Dの世界に転生する事になる。そこそこ力を貰い頑張っていく物語である。この度初めて小説を書く、トトロ1234です。何分初めてなので文字ミスや、不定期更新があると思いますが、よろしくお願いします。

プロローグ1

「あれ、ここは」

ふと辺りを見るとそこには豪華な服を着た男性が立っていた。

「やっと起きたか、早速だがお前には転生してもらおうぞ。ああ、お前には拒否権がいから。」

急に変なことを言ってくる男性。

「あなたは誰ですか。というかここはどこ。」

「ああ、すまない説明がなかったな俺はロキお前から人間から見ると神様だな。」

急に神様という男

「神様？冗談をよしてくださいよ。」

「残念なことに、冗談ではないんだがな、これが、まあ簡単に言うとお前は死んだんだ。ほれ思い出してみろ、お前は車にひかれて死んだ。」

そお言うのだんだんと思い出してきた。そうだ俺あの時車に跳ねられて死んだのか。

「思い出したか、まあ今はどうでもいい、これから転生の説明をしてやる」

「転生？」

「そうだ、簡単に言うとはかの世界に行ってもらう。まあ、タダとは言わんなんか能力をくれてやる。と言っても、もう決めてるんだが。」

「なんで能力なんかくれるんだよ。」

つか、勝手に決めんなよ。

「お前が行く世界はそこそこ危険だからな。それにお前を殺したのは、俺だしな。だから転生させるんだが。」

今なんて言ったこいつが俺を殺した!?

「まあ、そういうことだから、逝ってこい。」

「ちよ、ふざけんじゃねえ。」

そう言つと、突然地面に穴があいた!

「じゃね〜〜^^」

「わあああああああああああああああああああ!?!」

「いったか。まあ、転生させたんだ、楽しく見せてもらおうかな。」
なあ、……人間。

キャラ設定 能力設定

名前

芳乃連夜

容姿

fortissimoの芳乃零二

年齢

主人公と同じ年

ステータス

筋力 B + 魔力 EX

耐久 A 幸運 A

敏捷 C +

能力

復元する世界^{ダ・カーボ}

対象を24時間以内の状態に戻すことが出来る能力。また24時間以内に会った人物なら手元に呼び戻すことも可能。ただし例外としては対象の魔力に関しては戻すことが出来ない。

戦闘においてあまり役に立たない能力に思えるが、相手を強制的に召喚して、隙を作つて攻撃をおこなうという手段などにも使える。また「術式固定^{アインハルト}」を併用することによって、相手の攻撃をくらつても元に戻し続け何もなかったかのようにする技術を会得している。

神討つ拳狼の蒼槍
フェンリスウォルフ

無意識に擬似概念魔術兵装によって自身の膨大な魔力を拳に集中させて繰り出す拳撃。その威力は神話魔術と互角の威力を持つ。

ブリューゲル・ブリッツ
瞬間魔力換装

かつて魔力魔術兵装と呼ばれていた戦闘技術で、自身が独学で戦闘経験と訓練で編み出した技。一瞬だけ己の魔力を爆発的に高め、自らに取り込み固定することによって自身が弾丸のようになって移動することが出来る身体能力の強化。時空間すらも歪めるほどの魔力爆発が発生するほどで、そのスピードは光速をも凌駕する。魔力消耗が激しいので長時間の使用には向かない。

九つの世界
ノイトゥング

九つの並行世界から任意に結末だけを手繰り寄せることが出来る能力。しかし、発動する確率がすくない。いまは練習中。

神器

幻想の鏡の虚像
ファンタズムミラー

この神器は、単純に自分または他の人の分身を生み出す能力。ただ実態がないため分身で攻撃する愚か物をもつことすらできない。

あの神から転生して数十年、俺は貰った能力の修行をしていた。あの神が言うにわ、この世界は危険だと言っていたが、この数十年は平和が続いている。まあ、平和が続くのはいいことなのだが。

「あ〜〜眠いぜ。」

今、俺は学校の通学路を歩いている。数十分、歩いたらがっこうについてしまった。さっさと教室に入ると、エロ三人組いた。

「よ、お前たち朝から元気だな。」

そう言つと振り向く三人組。

「おう、連夜おはよう。」

そう言ってきたのは、兵藤一誠、通称イツセーこいつとは幼馴染だったりする。こいつはただこの学校に女子が多いだけこの学園に入ってきたスケベである。

「よー心の友よ、おはよう。」

次にこいつは、松田。爽やかなスポーツ少年に見えるが、変態だ。

「ふっ……今朝は風が強かったな。おかげで、朝から女子高生のパンチラが拝めたぜ。」

キザ男のようにカツコつけているメガネは元浜。メガネを通して女子の体型を数値化できる特殊能力を持っている変態だ。

「よー連夜、聞いてくれよこいつ女子と付き合っているとか夢見ているんだぜ。」

「いや、ほんとなんだって!」

「そうか、イッサー早く病院行った方がいいぞ。」

「ちが~~~~う!」

「五月蠅い!ほらさっさと座れ。先生来るぞ。」

自分の席に行って寝た。

放課後

「じゃあなお前たち。」

「おい最近、付き合い悪いぜ。」

「そうだぜ。」

そう言ってくる

「仕方ないだろ、バイトなんだから。そういうわけだからじゃあな。」

そう言って教室を出ていく

「あゝあ、遅くなっちゃった。」

そう言いながら夜道を歩いていると、上から何か降ってきて反射的に避けた。落ちたものを見ると光の槍見たいのがあった。

「ほーお、今のを避けるか人間。」

上を見ると黒い翼が生えた男がいった。

「だが、お前はここで死ぬ。お前の身に神器あることを恨むんだな」

男はそう言って光の槍を放ってきた。急なことで避けられなかったため貫いてしまった。

そして男はそのまま帰ろうとしたら、声が聞こえた。

「復元する世界」ダ・カーポ

「てめ、何しやがる。」

そう貫いたはずが何もなつかたようにつ立っていた。

「自分からやってきたんだ、やり返されても文句わ言わねえよな。」

そう、膨大な魔力纏わせながら言ってきた。

その様子見ていた者にきずいてはいなかった。

「貴様、どうやってその傷いや、何だその膨大な魔力は!!」

そう言うてくる男。

「はん、さっきまでの威勢どうした。」

「なめるな!! たがが人間風情が!!」

光りの槍を向けてくる男。しかし、貫こうとしたら誰もいなかった。

「フリーゲル・ブリッツ
瞬間魔力換装」

声が聞こえたあと、いつの間にか後ろにいた。

「これで終わりだ! 神討つ拳狼の蒼槍!!」
フェンリスヴォルフ

その拳には、膨大な魔力を込められていた! まるで存在自体喰らいつくすように。その辺周辺は塀やらガードレールや道路が無茶苦茶

に喰いあさわれたようになった。

「やべ、やりすぎた。百分の一ぐらいでやったのに。」

「これ直さないとやばいよな。はあ。復元する世界ダ・カーポ」

そう言って辺りを戻す。

「それにしても、あいつはなんだったんだろう？」

そのまま家に帰っていった。

「はい部長、今さっき人間が墮天使を倒してしまいました。」

「人間ではありえない膨大な魔力を。」

「では、部室に戻ります。」

これが塔城子猫とうじょうこねこが芳乃連夜に興味をもった瞬間であった。

「ふあゝ寝みいぜ。昨日の夜せいで全然ねむれなかったぜ。」

時間的にもいつもより早い今日はイッサーと行くか。

「さて飯でも作りますか。」

飯を食い終わったあと二軒隣のイッサー家いった。

「おい、イツセー今日は一緒にいこうぜ。」

玄関の扉が開いたら衝撃の光景があった。

それは、イツセーが美少女といたからである。

朝の登校俺はこれまでこれほどの視線を感じたことがない。原因は言うまでもない、隣の奴らが原因だ。何故あのイツセーが三年のリアス・グレモリーがイツセー家いたのかがわからない。いつの間にか学校の玄関ついていた。

「後で使いを出すわ。放課後にまた逢いましょう。そこの貴方も。」

微笑みながら、そう告げてきた。

何故？俺も？

よくわからないが、そのまま教室に向かう。そしたらいつの間にかイツセーの後頭部を殴る奴がいた。

「どっぴいつことだー！」

涙を流しながら松田が叫ぶ。

俺はそのままイッサー囃に使い席に着いた。

放課後。

「や、どうも」

教室を訪ねてきた男子を見た。イケメン王子こと、木場裕斗きはゆとだった。

「で、何のご用ですかね。」

不機嫌な声で言うイッサー

「リアス・グレモリー先輩の使いで来んだ。」

「……OKOK、で俺どうしたらいい。」

「つか、なんで俺も呼ばれたんだ。」

「いやー！」

急に女子たちが叫び出した

「汚れてしまっわ、木場君！」

「木場君×兵藤なんてカップリングは許せない！」

「うっん、もしかして芳乃君×木場君かも！」

「イッセーと俺は思った。」

（うぜ。マジうぜ）

L i f e 3

木場の後に続きながら向かった先は、後者の裏手だ。

木々囲まれた場所には旧校舎呼ばれる、現在使用されていない建物であった。

「ここに部長が居るんだよ。」

そう告げる木場

それにしても綺麗だ掃除はしているということだろう。

そうしてるうちに、目的の場所とやらについたみたいだ。木場の足が、とある教室の前で止まる。

戸にかけられたプレートを見る

「オカルト研究部」

なぜオカルト？

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってきて頂戴。」

先輩は中にいるようだ

戸を開け、入ると、室内に至るところに謎の文字書き込んでいた。そして、一番特徴的なのは中央の円

陣。あとはソファーいくつか。デスクも何台が存在する。ソファーに座っている女の子を見た。確か一年の塔城子猫。

こちらに気づいたのか視線が合う。

「こちら、芳乃連夜くん、兵藤一誠くん。」

木場が紹介してくれた。そしたら、ペコリと頭を下げる塔城子猫。

「食べますか？」

ようかんを差し出してくれた。

「ありがとうございます。」

と言ってようかんを貰った。

そしたら水の音がきこえてくる。

よくみるとシャワーカーテンがあった。って、シャワー付いた部屋なのか！

水をとめるおと

「部長、これを。」

奥にだれかいるのか

「ありがとう、朱乃。」

カーテンの奥で着替えて着替えているようだ。イッセーをみると案の定、鼻を伸ばしてた。

「……いやらしい顔。」

ぼそりと呟く声。俺もそう思う。

「ごめんなさい。昨晚、イッセーのお家にお泊りして、シャワーを浴びていなかったから、いま汗を流したの。」

って、やっぱり泊まっていたのかよ！

視線が先輩の後方に映る。確か姫城朱乃^{ひめしあけの}

「あらあら。はじめまして、私、姫城朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを。」

ニコニコ顔で挨拶される

「こゝ、これはどうも。兵藤一誠です。こゝ、こちらこそ、はじめまして！」

「芳乃連夜です。こちらこそはじめまして。」

俺たちは挨拶を交わす

それを、「うん」と確認するリアス先輩。

「これで、全員揃ったわね。芳乃連夜くん、兵藤一誠くん。いえ、イッセー。」

「は、はい」

「はい」

「私たち、オカルト研究部はあなた達を歓迎するわ。」

「え、あ、はい。」

「はい」

「悪魔としてね。」

「どちら、俺の平和が崩れそうです。前世のお母様、お父様。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2532y/>

復元する世界（ダカーポ）持ってハイスクールD×D転生する

2011年11月7日13時03分発行